

アレキサンドリアからの手紙 ⑥

(E-JUST : Egypt-Japan University of Science and Technology)

大阪大学大学院工学研究科
電気電子情報工学専攻教授

河 崎 善一郎

7. エジプト人氣質

エジプト人は、人が良く、親切で、賑やかしく、いささかお節介であることから「アラブの大阪人」と言われているそうです。私自身で、「アラブの大阪人」と呼ばれているかどうかを、しかと確かめた事はありませんが、お節介であることは日常生活でよく経験させられます。実際街中で道を誰かに尋ねておりますと、決まって何人かが近寄って来て、ああだこうだと教えようとします。あの集まり様は「なんや、なんや」と寄って来る大阪のおばちゃん達とそっくりです。ただ大概の場合、英語が通じないか、通じたとしても片言ですから、教えられがいがありません。通じないのはまだしも、最後には尋ねた私をほうっておいて、教えに来た何人かが、それこそ口角泡を飛ばすがごとくで議論を始めてしまう、なんてことも日常茶飯事です。彼等の会話を、判らないながら聞いておりますと、どうも道順について議論している様で「俺の方道順の方が判り易い!」「いや俺の道順の方が、距離が短い!」と、お互いに自説を主張しているらしいと想像できます。こんな我の強い面も「アラブの大阪人」と言われるゆえんかもしれません。

それにエジプト人は、西洋人（彼等が西洋人かどうかという議論はさておき）には珍しく、本音と建前を使い分けます。まるで私たち大阪人が「それ考えときますよって、また今度…」というのと全く同じ感覚で交渉をうち切ります。ですから、翌日の会合を約束するとき、彼等はその時刻は都合が悪いとは絶対に言いません。

「そう、明日午前10時ね。大丈夫だと思うので、行く様にするから…」と返って来たら、定刻には十中八九は現れません。そして少し遅れて電話がかかって来て「道路が事故で渋滞しているから…」。「急用が出来て行けなくなったから…」とかいった言い訳があるのはまだ良い方です。全く何の音沙汰もなく来ない

という事も稀では無いのです。

ついでながら、定刻を守らないというか時間にルーズなもの、彼等の特徴の一つで、こうなって来ると「アラブの大阪人」との俗称は、大阪人には良い迷惑といったところだと、私は思うのですが…。

こんな「アラブの大阪人」と、E-JUST で一緒に働いている若い友人は、「エジプト人は、ラクダと同じだ。見栄っ張り、強情で、嘘つきで、我儘で、時間にいい加減（のろま）である!」と酷評します。そこで今日はこれらの諸性質を、私が良く経験するエピソードを例に紹介します。

エピソード1（見栄っ張り）

エジプト人は、「知らない」「できない」とは先ず言いません。試験問題で出来ないのがあったりすると、試験の後でやって来て「本当は判っているんだが、あのときまたま思い出さなかった。」と言い訳をします。「それを知らなかったというのだろう。」と、やりこめると「今ならできる。」と、まさに後出しじゃんけんで、見栄っ張りもここまでくれば立派なものです。

冒頭にあった、街中で道を尋ねられる話、尋ねられて知らない場合でも、知らないというのが恥ずかしいらしく、見栄を張ってあれこれいい加減な説明をするので、尋ねている私達にしてみれば迷惑です。結果的には嘘を教えられた事になり、若い友人が「嘘つき」と酷評する一因にもなっております。

エピソード2（強情）

エジプト人は、自分が信じていたら、たとえその論理が破綻しても譲ろうとはしません。少し前の事になりますが、レンタカーを利用した時のことです。余談になりますが、レンタカーといっても私自身が運転するのではなく、運転手さん込みでレンタカーするので、この国では交通ルールやマナーがあってない様な

物、とても運転はできません。

さて、仕事を終えて帰宅となったのですが、折悪しく通勤時間帯となり大渋滞に巻き込まれました。こんな時エジプト人の運転手さんは、抜け道を利用したがります。直進道路が渋滞していると、先ずは道を走ろうとするのです。その日の渋滞はどういう訳か異常とも言えるようでしたから、私は「どうせ自宅に帰るだけだから、気長に大通りを走ろうよ。」と提案したのですが、運転手さんは聞く耳を持たずでした。そして右に折れ、左に折れしながらどんどんと狭い道に入っていきます。あまりない信号ですが、たまにある信号も当然の様に無視、どうやراすると一方通行の狭い路地を逆行すらするのです。そしてとうとう前にも後ろにも進めなくなり、渋滞の道を走ったとしても既に自宅に到着している筈の時刻をとうに過ぎてしまいました。さすがの私も、「だから今日は大通りを行こうと言ったのに！」と愚痴ったところ、「I know the way, since I was born and grown up here! (俺はこの街で生まれ育ったのだから、道を知っている) と、かなりきつい調子で返してきました。どうも非を認めたくないのですね。これもまた冒頭で述べた、道を尋ねた時のお節介さんとの議論と同じ。何人かがお互いに自説を曲げず延々議論、強情の極みですね。いやはや強情も、これまたここまで来れば見上げたものです。

エピソード3 (嘘つき)

これはつい先日の経験です。

自宅のエレベータボーイの中に、一人気の合うヨーセフ君が居ます。ヨーセフ君が話すのはアラビア語だけで、英語はほとんどできないのですが、それでも馬が合うというのはそんなものなのでしょう、お互いになんとか通じるのです。そのヨーセフ君と久しく会っていなかったもので、週末の朝会いたいと考え、たまたま居た少し英語のできるエレベータボーイに、ヨーセフ君がどこにいるのか尋ねました。ところが「ああ、今日は彼はお休みだ。朝から顔を見ていない。」と、毅然として言うのです。あまりの毅然ぶりに私は疑う事もなく、「ああ今日はお休みなんだ。」と一人納得をして、まあ来週末までお預けかと諦めました。そして、エレベータが1階に到着しドアが開きますと、目の前にヨーセフ君が立っているではありませんか。私は思

わず、休みだと教えてくれたエレベータボーイの顔を見つめました。全く知らぬ顔の半兵衛を決め込んでいます。本人が嘘をついているという意識が無いだけに怖い気がします。なおヨーセフ君とはその後しばしばボディランゲージで会話を楽しんだことは、言うまでもありません。

エピソード4 (我儘)

オサマ君という大学院博士課程学生がいます。E-JUSTでは博士論文の目処がついた時点で、彼等を日本の大学に留学させるシステムをとっています。留学の目的は、日本の大学院教育や研究を経験して頂き、将来に役立ててもらおうという点にあります。そしてオサマ君はその目処がつき、大阪大学に半年間留学して貰う事になりました。オサマ君は早速必要書類をメールで送って来て、その後連日の様にメールや電話で、大阪大学からの招待状はまだ届かないのかと問い合わせてきました。ただ長期の留学ですから、手続きはおいそれと進むわけではありません。それでも阪大のスタッフに無理を言って頑張ってもらいましたので、通常なら2ヶ月近くかかる手続きを3週間余りで切り上げ、大阪大学からの招待状含め必要書類を全て整える事が出来ました。オサマ君は大喜びで、急ぎカイロにある日本大使館にVISAを申請して、留学開始まで秒読み段階に入りました。ところが阪大に送ってもらった書類に2、3不備があったので書き換えて貰おうとメールしてみたのですが、応答なし。止むを得ず指導教授に連絡をとり、私に電話をする様伝言いたしました。このままでは留学が1ヶ月遅くなってしまうかも知れないというので、私としては必死です。やがてオサマ君から電話がかかってきて、急ぎ書類を作rinaおして欲しいと告げますと、当人は何と家族連れでシャルムアンシェークというリゾート地に来ており、数日は帰れないし、パソコンを持ってきていないので書類の書き換えも出来ないというのです。あの時ばかりは私も、「何と勝手気ままな。あれだけ私を急かせておいて、自身はリゾート地でバカンスか！」とその我儘ぶりに啞然とし、厭味を込めて「すぐに帰って来てつくり直す様！」とだけ告げて電話を切りました。すると程なく指導教授がやってきて、「私が作り変えますから。」とえらく恐縮、結果としてはオサマ

君は、彼の希望した今年の4月1日から、大阪大学に行って研究をしています。オサマ君の我儘にエジプト、日本の教授2人が振り回されたという次第です。

いやはや、今日は随分とエジプト人をこき下ろしてしまいました。もう一項「のろま」というものもあるのですが、これ以上の悪口、罵詈雑言は止める事にします。ただエジプト人のこういった気質の幾つかは、「エジプト人は他人に優しいからで、知らないと答えると

相手が不安に思うから。出来ないというと残念がるから。そこを判ってあげないと…。」と解釈する人もいます。

諸先輩、後輩の方々はどのように考えられますやら…。

(通信 昭和48年卒 50年修士 53年博士)

